



紅茶が香る
イギリス時間に魅せられて



英国紅茶研究者、ライター
斉藤 由美さん

1967年大館市生まれ。大学卒業後、ブルックポンド紅茶を取り扱う会社に入社、人事担当を経て、紅茶教室の企画・運営などの事業で副支配人を務める。2000年ユニリーバに転職、リプトン紅茶のPRを担当。11年独立後は英国紅茶研究者、ライターとして活動し、14年大館市に帰郷。17年紅茶専門店 & 紅茶スクール「イギリス時間紅茶時間」を同市にオープン。著書は「しあわせ紅茶時間」(日本文芸社)を含め4冊。監修・同行するイギリス紅茶ツアーを10月下旬に実施予定
<http://englishtime.citysite.link>



紅茶の世界は、奥深い。産地やブレンド、フレーバーなどその種類は無量大だ。飲むだけでなくスイーツや料理の材料にしたり、バリエーションを楽しめるのも紅茶ならではの魅力。そして何より、どんな時間をもプラスにする演出力。季節や時間、場所、人に合わせて、紅茶やフードの種類や食器、テーブルセッティングを工夫することで優雅で和やかなひとときとなる。

「日常の暮らしの中にあるささやかなことをドラマチックにしてくれる。紅茶はすてきな存在なんです」

紅茶と共に歩む人生のように見えるが、出会いは偶然だった。人事担当を経て新プロジェクトに配属されたのが始まりだ。紅茶専門店の立ち上げ、紅茶スクールの企画・運営、会報誌の編集、海外紅茶ツアーの企画・同行。

「紅茶についてまだ詳しくない時期にツアーに同行したところ、参加者に知識不足を指摘されて。お叱りを受けて激しく落ち込み、そこから自分でさまざまなことを学び積み重ねた経験によって、世界が広がりました。紅茶、イギリスの文化、英語、陶磁器のこと。イギリス人と積極的に情報交換したり、イギリス関連の書籍やテレビ番組チェックなど無我夢中。チャレンジする分野がどんどん広がっていききました」

紅茶を入れる時のジャンピングに焦点を当



てたテレビ番組に出演したことも、大きな転機となった。メディア出演が増える中で幅広い紅茶経験を重ね、やがて帰郷を選択する。結婚して故郷で始めた生活は、最初は新鮮だったものの、都会とのビジネス習慣や考え方の違いに困惑し、経験を生かせる仕事が見つからず苦しんだ。

ある日、商店街を歩いていたら貸店舗を目にし、突然ビジネスの構想がひらめく。うまくいかないことを取り巻く環境のせいにはかりせず、もともと自分から地域に溶け込んでいくべきだと思ひ、紅茶専門店と紅茶スクールの開業という新しいチャレンジを決意した。

「自分の店を持ちたいという思いは特になかったのですが、紅茶の経験をさらに重ねる



大館市に開店した紅茶専門店 & 紅茶スクール「イギリス時間紅茶時間」

チャレンジと捉えたら、目の前の扉が開いたように感じました。これまでの経験の集大成が、ここにはあるように思います」
がむしゃらに知識を深めてきた生き方がいま、大館で花を咲かせている。
「紅茶をおいしく入れられるようになると、食器に興味が出てきて、憧れの食器を手にする、誰かを招いてティータイムを一緒に過ごしたくなる。人を招くなら花を飾りつけきれいにしようか、どんなお菓子を用意しようかと思ったり。そうやって、暮らしの中の一つ一つが輝いて見えてくる。そんな幸せな時間を持つことの心地よさを、紅茶を通じて伝えていけたらと思っています」
ふんわり漂う紅茶の香りが、人生を包み込んでいく。